科目名　　フランス語スキル（フランス語と市民性）
開講学期　　2022 年度春学期（水曜日 3 時限）
授業教員名　　倉舘健一

【講義概要】

この科目では、各人の市民社会でのあり方を、異文化間、とくにフランス語圏の言語文化を通した学びから深めるため、 いくつかのアクティビティをもとに考えていきます。

多文化社会化は世界的な流れであり、大都市やネット空間ばかりでなく、ローカルでも直接・間接的に波及しています。またこれまでの外交感覚の未熟と向き合い、個々の生活や欲求の充足はもとより、自ら思考し判断し自身や社会の夢や希望を実現してゆくためにも、このような市民社会の変容、またそこに表れる価値観の多様性に無頓着ではいられません。

それぞれの暮らしや社会問題、ことば、史実、思想について、フィールドワークや解釈学的アプローチによってその経緯の理解を深めていくことにこそ、大学での外国語の学びの大きな意味があります。また人文学のみならず、生命史研究や宇宙考古学など、自然科学や応用科学の成果は近年目覚ましく、意識やことば、またジェンダーや宗教の起源や経緯について、これまでにない角度から理解を深めることを可能にしています。地球環境に直結する問題（洋の東西、文明の光芒や対立、また近代の実態）には、キリスト教的非対称性思考（科学、資本主義、グローバリズム）がその核心にあります。フランス語圏での議論の文脈に触れたうえで、新たな知見を元に、これらの課題を位置づけていく営みは有効で、大きな知的冒険があります。この科目は冒険への橋渡しを目指します。

そもそも異文化間能力とは、言語文化学習のみならず、学び一般においても決して補完的な能力ではないのです。そこで、死生観や価値観のギャップや葛藤、対立などの対処について、一人ひとりのこれまでの言語学習やさまざまな他者性の経験をもとに、言語を手がかりに、本質探求的（クリティカル）思考を重ねていきます。こうして「市民性」への理解と「ソーシャル・マジョリティ」研究を深め、「当事者研究」の観点から、市民社会でのあり方および対話における言語使用に関しての自己信頼を高めていきます。

【主題と目標】

内外の社会問題について、個々に日本語や英語やその他の言語リソースを通じて触れているものに加えて、フランス語圏のさまざまな地域での状況や資料などを素材にし

ていきます。日本語あるいは英語、また英語化されたようなリソースからだけでは捉えきれない現実と世界の多様性に触れ（ « langue receptiva » を広げる）、実際に市民社会の諸問題に対応していく糧とする（「ことばの市民」になる）ことを狙います。

異なる言語・メディアでの情報を吟味し、そして学術言語（アカデミック・ランゲージ）を踏まえつつ、自らの情報発信を準備します。言語や想定する受け手が変化することで内容や方法に変化が生じるようすを実際に感じ取っていきます。こうした振り返りを重ねていき、学期末に向け、社会に公開されたメディアへの投稿を目指します。

参考 1) « Langue receptiva » について https://www.luistertaal.nl/en/

参考 2) 学術言語, CLIL / EMILE（内容言語統合型学習）, « Disciplines non linguistiques (DNL) » について https://rm.coe.int/guide-pour-l-elaboration-des-curriculums-et-pour-la-formation-des-ense/16806ae61c

【履修条件】

フランス語インテンシブ４修了。または資格試験合格者。

【提出課題・試験・成績評価の方法など】

アクティビティごとに課題を作業していきます。

成績評価はこちらで準備する評価グリッドによって算出していきます。そこに産出物の点数および文量、自己評価などを加え、総合的に評定を決定します。